# 限界タクシー

## ～首落（くびおち）村奇譚

【登場人物表】

白井（しらい） 勤（つとむ） （４５） タクシードライバー。
丁寧な紳士だが、ある条件で豹変する。限界集落「窪内村（くぼうち）」で、ボランティアタクシーを運転している。

勝村（かつむら） 沙也加（さやか）（３２） 東京から来た女刑事。

下田（しもだ） ゆり子（８０） 村の住人。
亡き夫思いのニラ農家。

橋上（はしうえ） 京（みやこ） （８５） 村の住人。
品の良い洋館に住んでいる。

保坂（ほさか） 和代（かずよ）（８３） 村の住人。
おしゃべり好きで、足が悪い。

トミナガ （２９） YouTuber。松風（まつかぜ）荘住人。
限界集落で暮らすチャンネル「限界暮らし」で大人気（自称）。

メイ （１８） トミナガの大ファン。

合田夫婦（３５）　東京から越してきた帰農者。
キムラ（３０）　松風荘のひきこもり。
モリノ（３０）　松風荘のひきこもり。
オダ　（３０）　松風荘のひきこもり。
八ケ岳（６０）　白井の上役。市役所職員。
出口　（６５）　少し前に村に来た人。

村人１、２、３　老人たち。
客１、２（３０代）　合田の客。
居酒屋の大将（６５）
長野県警の刑事
エロイギャルたち

明神　昭（７０、当時）　２５年前に事故死した、村長。

○白い霧、窪内村の入口

白い霧。

朝霧で視界が真っ白だ。

道。

道の先は山の入口。かつて大鳥居があったが、根本で折れて今は切り株のみが残っている。

脇に朽ちたバス停。「窪内村入口」の消えかかった文字と、「廃線」のペンキ。

霧の中から、二つのライトが現れる。

それは黄色のワゴンタクシー。

「みんなの足ニコニコタクシー」と、ペイントされている。

運転する白井（４５）。

○村の俯瞰、晩秋

晩秋、紅葉も盛りを過ぎたころ。

山林、棚田、休耕田。張り巡らされた

血管のような水路。廃屋。
細く、くねくねした道を走るタクシー。

○下田の家の前、霧

小さなニラ畑のある家に、タクシーは停車。
白井は玄関に立ち、腕時計を見る。
８時きっかりまであと５秒、４秒、３……０丁度でチャイムを押す白井。
下田（８０）の声「はーい」
白井　「ニコニコタクシーの白井です。本日火曜は、病院です」
玄関があき、下田が。
白井　「おはようございます。保険証はお持ちですか」
下田　「（うなづく）ありがとう。今日は霧がひどいわね」
白井　「もう慣れました」
下田　「年寄りにはこたえるよ」

○市の病院、駐車場

タクシーの中で待つ白井。

下田が出てくるのを見てドアを開ける。

○帰りのタクシー車内

薬袋を抱えている下田。

白井　「あ、寄りますよね？」

下田　「お願いします」

○街道沿いの小さなパン屋、前

小さなパンを千切って、少しずつ食べる下田。

白井　「そのパン、ずっとお好きなんですか？」

下田　「そうか。白井さんは知らないのね。私の死んだダンナ」

白井　「ダンナさん」

下田　「これは、彼が初めての給料で買ってくれたパンなの。『一番安いのを』って文句を言ったら、『何個も食わせてやれるから』って言うのよ。私はその思い出をまだ食べてるのね。……あ、食べてみます？　全然美味しくないんだけど」

白井　「（もらって食べる）……ほんとだ」

二人、笑う。

○走るタクシーの車内（村～橋上の家）

窓の外を見たまま何もしゃべらない、上品な感じの橋上（８５）。

タクシーが止まる。そこは古い洋館。

橋上、一万円を出す。

白井　「市内一律５００円です。９５００円のお返しで」

橋上　「お釣りはいいわ。取っといて」

白井　「？」

橋上　「チップよ。いつもお世話になってるでしょう？　何かおいしいものでも食べて」

白井　「いえ、受け取れませんよ」

橋上　「どうして？　私の感謝の気持ちよ？　５００円だけそのボランティアの箱に入れて、あとは懐にしまうのよ？」

白井は、銀行員のように千円札を数え、橋上に渡す。

橋上　「他の運転手さんは受け取ったわ？」

白井　「……私は、私なので」

橋上　「……」

○走るタクシーの車内

沢山買い物袋を抱えた、おしゃべりの保坂（８３）が乗っている。

保坂　「（身を乗り出して）白井さん、アンタ橋上さんの一万円断ったんだって？」

白井　「えっ？　なんでそれを御存じなんで

すか？」

保坂　「どんだけここが限界集落限界集落言われてもさ、どっかで誰かが見てるもんよう！」

白井　「……では、他のドライバーが受け取る所も見られてたんですかね」

保坂　「関係ないわよう！　他の人がやるようにやればいいの！　白井さん、マジメすぎるのよ！」

白井　「元、銀行員なので」

保坂　「そうだったそうだった！　でも目立つことすると、この村では生きていけないわよ？」

白井　「私、目立ったんですか」

保坂　「抜けがけは許さない。その代わりみんなが助け合う。それが村ってもんでしょ」

タクシーは保坂の家につく。

白井は大量の買い物袋を玄関まで運んであげる。保坂は足が悪く、杖で歩きづらそう（恰幅がよすぎるのもある）。

保坂　「そうそう！　知ってる？　滝壺にイタチの死体が上がったって！」

白井　「イタチ？」

保坂　「水流の関係か、あの辺で死んだのは必ず滝壺に浮かぶのよね！」

×　×　×

インサート。暗く冷たい滝壺に浮かぶ、イタチの死体。

×　×　×

保坂　「きっと縁起悪いことが起こるわよ！イヒヒヒヒ」

無邪気に喜ぶ保坂。

ふと視線を感じる白井。

畑仕事の老人がこちらを見ている。

思わず会釈する白井。

○霧の中の山道

車が脱輪して立往生している。

白井のタクシーが通りがかり、手伝う。

×　　×　　×

それが片付いて。

車の主、八ヶ岳（６０）「ありがとう白井くん、助かったよ。……あ、そうだ！　勝村さんを白井くんにお願いできるんじゃないかな？」

同乗者の、勝村（３０）。

八ヶ岳「東京から来た刑事さん」

白井　「刑事……さん？」

八ヶ岳「事件を調べに来てるんだそうだ。（ちょっと楽しそうに）殺人だとよ」

白井　「えっ」

八ヶ岳「勝村さん、例の限界集落担当のドライバー、白井くん。村の人間関係も一通り知ってる」

勝村は白井に一礼、警察手帳を見せる。

勝村　「勝村沙也加と申します。公式捜査ではなく、私個人が休暇を使って捜査している件があります。ここで起きた２５年前の事故が、殺人ではないかと疑っています」

白井　「殺人……事件ですか？」
勝村　「当時の村長、明神昭氏の自動車死亡事故。もしこれが殺意のあったものと仮定すると、時効まであと三週間なんです」
八ヶ岳「つまりアレだ。時効寸前の村長殺し」
勝村　「殺人は法改正で時効がなくなりました。私が追っているのは、殺人未遂の時効二十五年です」
白井　「お願いとは……捜査協力ですか？」
八ヶ岳「白井くんはこの界隈に詳しいし、毎日村の人を乗っけるじゃない？　移動中にみなさんに話を聞くといいんじゃないかって。移動尋問室みたいな」
勝村　「お話を聞くだけで、尋問するわけじゃありません」
八ヶ岳「私は役所の仕事もあるし、白井くんなら適任かと」
白井　「村の人の足を止めるわけにはいかないので、兼務ということでよければ」
八ヶ岳「うん。運転はそのままやって、勝村

さんが助手席に乗ってればいいのでは？」

白井　「……はあ」

勝村、丁寧にお辞儀する。

白井も思わず返す。

○街道沿いの事故現場

田んぼと街道があるのみ。

勝村　「２５年前の１１月３０日深夜０時。（指さしながら）こう入って来た明神氏の自家用車は、ブレーキを踏みながら田んぼに転落。シートベルトをしていなかったため頭を強く打って死亡。当時ガードレールも、街灯もなく」

白井は周囲を見回す。

勝村　「ドライバー視点から見て、普通の事故だと思います？」

白井　「慣れている道ですと、街灯がなくても運転できるとは思います」

勝村　「平常時ならね」

白井　「？　……飲酒運転とか？」
勝村　「（ハンドルを握る手をつくり）村長の両手に、おびただしい数の傷があった。キリのようなもので貫かれ、数にして１１２か所。ハンドルは血まみれ」
白井　「……（眉をしかめる）」

×　×　×

当時のインサート。
おびえながらハンドルを握る明神（７０）。その両手から流れる血。
ぬるりと、ハンドルを持つ手が滑る。

○村の入口、大鳥居跡

勝村　「かつてこの村の入口には、大鳥居がそびえていたんですが……これ」
勝村が指したところには、白い塗料がこすったような痕。そこから鳥居が折れたようになっている。
勝村　「事故車と傷の位置、塗料が一致。村

人の証言から、事故以前までは鳥居があり、真夜中に大きな音があり、次の朝には倒れていたと」

白井、運転経路を歩いて想像する。

両手を見て、刺された跡を想像する。

後ろを振り返り、

白井　「その……何者かから、逃げていたんでしょうか？」

勝村　「単なる単独事故かも知れないし、考えにくいですが、錯乱して自分の手を刺しただけかも知れない。村の内部ではなく、外部から来た通り魔かもしれない。当時の捜査では、村人たちにほとんどアリバイがないんです。隣同士離れているし、監視カメラがあったわけでもなし」

白井　「単独事故か……否か」

勝村　「当時の長野県警は、証拠がないとして、単独事故扱いで捜査を打ち切っています。でもその犯人が、この村の中にいまだ息を潜めているとしたら」

白井　「そんな。皆、いい人ばかりでよ」
勝村　「運転手は、扉の前までしか知らないでしょう？」
白井、急に不安になり、村をのぞき込む。
霧の村は、迷宮のように見える。
タイトル　【時効まで、あと２１日】

○松風荘、前

YouTuberのカメラ映像、ライブ配信中。
トミナガ（２９）「ハイ！　大人気YouTuberトミナガの『限界暮らし』！　限界集落で、限界に暮らす！　（ポーズを取って）マジ限界！　今日は『椿油をつくってみた』！　えっと、昔ここで椿油をつくってたらしいんだけど、もう作る人いないんだってさ。なのでやってみるよ！　作り方はカンタン！　椿の種集めて、殻むいて、中身砕いて、蒸してふきんの中でギューッて絞るら

しい」

椿の種をカメラに見せる。

トミナガ「一個拾った！　あと１００個集めます！　マジ限界！（ポーズ）」

その画面の後ろを走る、白井のタクシー。助手席の勝村。

トミナガ「誰？　めっちゃ美人じゃん！」

○走るタクシーの中（村を案内）

助手席に勝村。バックミラーに松風荘が見えている。

白井　「今通り過ぎたのが松風荘です。市が若者を誘致する為に建てました。ネット引きこもりって言うんですかね。家賃を格安にしてネットだけは充実してます。あのトミナガさん、YouTuberです」

トミナガ、カメラを構えている。

勝村、スマホでトミナガのYouTubeチャンネルを再生しようとするが、読み

込まない。

白井　「あそこ以外は電波悪いですよ。あとで見られては」

タクシーは村を登ってゆく。

合田夫婦（３５）の家。

畑で落葉を焼いている二人。明るい顔で手を振る。

白井　「最近、東京から越してきた合田さんです」

勝村　「そういう人もいるんですね」

白井　「都会暮らしを忘れて自然と暮らしたいという人はたまにいるようですが、ここまで来る人は珍しいですね」

棚田の広がる絶景、下田の家、保坂の家、橋上の家を通り過ぎる。

○明神村長の家、庭

タクシーから降りた白井、勝村。

村一番見晴らしのよい場所に立つ廃屋。

白井　「かつての村長の家です。庭が村の神社を兼ねています。今は誰も住んでません」

朽ちた鳥居、神社の祠。

それぞれに椿紋が入っている。

白井　「気を付けてください。崩れるかもです」

古い物見の塔に手をかけようとした勝村、慌てて手を離す。

○村長の家、内

扉を開ける白井と勝村。埃が舞う。

白井　「明神家は代々神主だったようですが、断絶しましたね」

勝村、ハンカチで口元を抑えながら見渡す。古い仏像のようなものが安置。

荒々しく禍々しい。

勝村　「神社なのに仏像。……両面宿儺（りょうめんすくな）か」

白井　「？」

勝村　「民間信仰ね。古くて雑多な信仰だっ

たよう」

○村長の家、庭

外に出ると、村人（老人）たちが、手に野菜を抱えている。

トミナガもカメラを持ってやって来た。

トミナガ「なんだなんだ！　事件の匂いビンビンビン！」

白井　「みなさん、ご紹介します。東京から来た、刑事の勝村さん」

村人１「刑事？」

村人２「事件ですか？」

勝村　「２５年前の村長の事故死について、調べに来ました」

村人３「あれは、事故で決着がついたのでは？」

勝村　「長野県警調べではね。私は、そうでないと考えています」

トミナガ「（カメラに向かって）やべえ！

刑事だってさ！」

群衆の中から橋上が出てくる。

橋上　「具体的には、何をお知りになりたいの？」

勝村　「みなさん白井さんの車をご利用していると思いますが、その時にお話を伺う程度です。お手間を取らせるつもりはありません」

村人たち、野菜を勝村に渡す。

勝村　「え？」

村人１「持ってって」

村人２「この村は、外からの人にやさしいんだよ。持ってって」

両手一杯に持たされた勝村。

○走るタクシーの車内

勝村の膝の上には、野菜の山。

後部座席には杖を持つ保坂。

保坂　「アハハハ！　それで沢山野菜持たさ

れたんだ！」

勝村　「……はい。保坂和代さん、お話を伺ってもよろしいでしょうか」

保坂　「いいわよ！　（買い物袋からお茶の缶を出す）これあげる！」

勝村　「え？」

保坂　「この村は、お客さんに沢山上げる習慣なのよ！　ワイロじゃないわよ！　ガハハ！」

×　×　×

勝村　「……話は以上です。有難うございました」

保坂　「昔警察に話したことと同じだと思うけど、こんなんでいいの？」

勝村　「……では、ひとつだけ」

保坂　「？」

勝村　「明神村長の両手には、キリのようなもので刺した無数の傷がありました」

保坂　「知ってるわよ？」

勝村　「ひとつ不思議なことが」

保坂　「？」

勝村　「左手のほうが、刺し傷が多いんです。なぜだかわかります？」

保坂　「んー？　……自分でやったんじゃない？（右手でキリ持って左手で刺す真似）そんな訳ないか。ガハハ！」

○走るタクシーの車内

下田の話を聞く勝村。

勝村　「……お話は、以上です」

メモ帳を閉じる。

下田　「今年獲れたニラです。どうぞ」

ニラを後部座席から渡す。

勝村の足元には段ボール一杯の野菜。

勝村　「こんなに沢山頂いちゃって……（ふと考える）」

下田　「？」

勝村　「お土産渡さないと、どうなるんです？」

下田　「村八分よ？」
勝村　「え？」
下田　「一人だけ抜けがけしようものなら、怖い目に合うわ」
白井　「怖い目、ですか」
下田　「私は、合ったことがないけど」

○スーパー、駐車場

タイトル【時効まで、あと１８日】
タクシーから降りてくる保坂。
白井が持ってきたカートを受け取る。
保坂　「ありがと！　今日特売なのよ！」
スーパーの中へ。
勝村も空気を吸いに車の外へ。
白井　「ああ、合田さん、こんにちは」
駐車場の脇にいた合田夫妻ふりむく。
２人の若い「客」らしき人に、紙袋の包みを渡していたところ。
白井　「東京から来た、刑事の勝村さんです」

勝村会釈。

夫妻、勝村を見て急に挙動不審に。

合田　「あ……。ども……では畑に戻りますので」

急ぐ合田。客1、2も、その場を立ち去ろうとする。

勝村　「ちょっとすみません。その包みの中を見てもよろしいですか？」

客1　「え、なんで。これ任意ってやつですか？」

客二人、速足で逃げ出す。

勝村　「ちょっと！」

勝村、客1の手を掴む。落ちる包み。

白井がそれを蹴飛ばす。

勝村　「ナイス白井さん！」

客1を羽交い締めにしている。

合田、車を急発進させる。

勝村　「包みを開けて！」

白井、包みをあける。

ビニールに包まれた乾燥大麻。

勝村　「大麻？」

客１　「ちげーよ！　かきあげだよ！」

勝村　「白井さん！　車を出して！　彼らを追える？」

客１に関節技をかけて連行したままタクシーの後部座席へ。

○走るタクシーの車内

客１は手錠でドアにつながれている。

白井　「彼らは『畑に』と言いながら反対方向に走り出しました。この道を行けば追い付くはずですが、横道に入られると……」

勝村　「いた！」

合田の車、横道の進入禁止の柵を吹き飛ばして中へ。

白井　「……その道ですか」

白井の車もその道に入る。

○工事中止のドリームバイパス、走る車内

開発中の道。舗装もままならず、砂利道に草が生え放題になっている。

白井　「第三セクターが山の中を通すバイパスをつくってたんですが、政治家のスキャンダルで延期のままですね。村までの近道です」

勝村　「じゃあ彼らはやっぱり村に？」

白井　「勝村さん、ダッシュボードの手袋取ってくれませんか。あとシートベルトを」

勝村、後部座席から身を乗り出してダッシュボードを開けたタイミングで激しくカーブする。足元の野菜が飛ぶ。

勝村　「無理！　こんなの！」

出した革手袋を渡す。

白井、それをはめる。

白井　「……（目の色が変わる）」

勝村　「？」

白井　「シートベルトを締めろって言ったろ

この野郎！　車の中で野菜ごとミキサーに

なるぞ！」

勝村　「……え？」

白井　「つかまってろ！　ぶっ飛ばすぞ！」

アクセルを踏み込む。慌ててシートベルトをする勝村。

白井　「イーヤッホウウウ！」

客１　「はあああああ？」

後ろでゴムまりのように跳ねるしかない客１。またまた野菜が飛び回る。

合田の車に追いつく。

勝村　「追い付いた！」

白井　「そのケツにぶち当ててやる！」

合田、振り向いてこちらを確認した。

白井　「前見てろ馬鹿野郎！」

合田、ハンドル操作を誤りスピンして横転。

白井の車、横滑りして停車。

勝村、車から出てきた合田を投げ飛ばし、地面に押さえ時計を見る。

勝村　「１５時４８分、確保ー！」

○合田の家、外、夕

パトカーが集まり、警官たちが立ち入り禁止のロープを。集まる野次馬。

×　×　×

合田の家の中。

ケースの中で紫外線を当てた大麻草。

押収していく警察。

×　×　×

長野県警の刑事「東京からいらした刑事さんですってね。お手柄です」

勝村　「いえ、単なる偶然です。実は休暇中でして」

刑事、敬礼して現場へ。

勝村　「（白井に）実は私、『確保ー！』って言うの夢だったんですよ。ドラマとかでよく女刑事がやってるじゃないですか。それに憧れて」

白井　「夢だったってことは……」

勝村　「これまで一回も犯人を捕まえたことなくて。初めての『確保』でした」
白井　「……はあ」
勝村　「夢、叶った」
白井　「……」
勝村　「あの……私が私的捜査といったのは、それが理由です」
白井　「？」
勝村　「私、実は刑事をクビになりそうなんです。成績の悪い刑事なので。次の人事異動で、外される可能性が高いといわれました」
白井　「そうなんですか」
勝村　「だから時効を控えた事件ファイルを勝手に調べて、勝手に手柄を立てられないか、ってここに来たんです」
白井　「今二人、逮捕したじゃないですか」
勝村　「プラスとしては小さいです」
白井　「……しまった」
勝村　「？」

○スーパー、駐車場

大量に買い物の入ったカートを押してきた保坂。誰もいない。

保坂　「あれえ？」

○夜、街の小さな居酒屋

居酒屋の大将（６５）「ハイご賞味あれ！」

野菜料理が並べられてある。

箸をつける勝村。

勝村　「おいしい！　東京で食べるのとは全然違う！　野菜の迫力があるというか！」

大将　「このあと焼き物と煮物が来るんで！」

しばし堪能する勝村と白井。

白井　「ここの大将は、なんでも美味しくつくってくれます」

勝村　「助かりました。あんなもらってどうしようかと」

白井　「私が最初に来たときもここで調理してもらいました（笑う）」

勝村　「……あの、白井さんていつもそんな丁寧な感じなんですか？」

白井　「すみません。元銀行員なので、堅苦しいとよく言われます。運転手らしくないと」

勝村　「いや、あの……（手袋をはめる真似）」

白井　「ああ。ハンドルを握ると人格が変わる人、いるじゃないですか。それを普段は封印してるのかも知れません」

勝村　「……どっちが本当の白井さん？」

白井　「……どちらも私、ですかね」

勝村　「差し支えなければ、どうして運転手に？」

白井、箸をおいて。

白井　「早期退職したんです。丁度妻が、亡くなったところで」

勝村　「ごめんなさい。立ち入ったことを」

優しく首を振る白井。

白井　「尊敬する上司が、不正経理をやってたんです」

勝村　「え」

白井　「さらに上に報告したら、窓際部署に移され、冷や飯を食わされました。グルだったんですね、彼らは」

勝村　「それで、お辞めに」

白井　「人の集団が嫌になったんでしょうね。ちょうど妻も亡くなり、一人になりかったんだと思います。でも村の人は良くしてくれて、こちらでは良い人間関係を作らせてもらってるとばかり思っていました。でも、あの中に犯人がいるとしたら。そう言われて、思ったんです。今度こそ、見逃してはならない」

勝村　「……」

大将が入ってくる。

大将　「ちょっといいかな？　一応、耳に入れておかないとと思ってさ」

大将、ニラっぽい葉っぱの束を。

大将　「これ、スイセンの葉っぱだよ。ニラによく似てる。知らないと気づかないよ」
勝村　「？」
大将　「ニラはうまいよ。でもスイセンの葉は猛毒だ」
勝村　「え……」
大将　「誰にもらった？」
勝村　「どこかで、まぎれてたのかも」
白井　「じゃあ、何者かが、まぎらせたということですか？」
勝村　「……」
タイトル【時効まで、あと１８日】

〇松風荘、トミナガの部屋

トミナガ、カメラに向かって。
トミナガ「ハイ大人気YouTuberトミナガの、『限界暮らし』！　こないだの事件！　犯人の（ピー）夫婦、葉っぱ育てながら、別の葉っぱを育ててたって！　マジ限界！」

○村の入口、大鳥居跡

に現れた女子高生メイ（１８）。

メイ　「あー！　マジヤバイ！　これ！　絶対これ！」

スマホの画面と、大鳥居跡を見比べる。

メイ　「マジ限界！（ポーズを取る）」

画面の中のトミナガのチャンネル。

トミナガの後ろに映る村の入口。

○松風荘の前

メイ　「えっ！　マ？　マ？　マ？　ここじゃん！　ここ！　ここ！　聖地！　聖地ここ！　マジ死ぬ！　尊い！　尊すぎて死ぬ！　ぎゃーーーー！」

○松風荘内、トミナガの部屋

トミナガ「（外の物音を聞いて）ん？　何、また限界事件？　ちょっと外見てみるよ？」

○松風荘の前

ガラリと窓を開けるトミナガ。

メイ　「ぎゃーーー！　本人！　本人！　神！　神様！　会えた！　ほんとに会えた！」

トミナガ「……誰？」

○松風荘内、トミナガの部屋、夕

棚の上のドングリや流木を見ながら。

メイ　「これ食べれなかったドングリの回のやつで、これ滝壺で拾った流木かあ。懐かしいわー。あのときトミナガさん金髪だったんすよねー！」

トミナガ「あのさ……晩飯どうする？　食べ

てく？」

メイ　「マジすか！　私作りますよ！　材料も買って来たんで！」

トミナガ「は？」

メイ　「私、家出してきたんです！　出来れば泊めて欲しいんですが……」

トミナガ「え、なに、泊めたらヤっちゃうかもよ」

メイ　「そのつもりで来ました！」

○同、夜

セックスするトミナガとメイ。

○松風荘内、ひきこもりのキムラの部屋

メイの喘ぎ声がうるさい。

キムラ、ヘッドホンをしてPCに集中。

○同、ひきこもりのモリノの部屋

壁に耳を当てて興奮しているモリノ。

○同、ひきこもりのオダの部屋

コップを当てて、コップありなしで効果を確かめながら喘ぎ声を聞くオダ。

○翌朝、松風荘内、共同キッチン

朝ごはんを甲斐甲斐しくつくっているメイ。

メイ　「ダーリン、卵２個でいい？」

トミナガ「あ……ありがと」

メイ　「うふふ」

と、ひきこもり達が顔を出す。

キムラ「……おはようございます。あ、運びます」

メイ　「ありがとう！　えっとお名前……」

キムラ「キムラです」

モリノ「あ、モリノです（別の何かを運ぶ）」
オダ　「オダっす（調味料をテーブルに）」
メイ　「こんな感じなんですね！　松風荘の共同生活って！」
トミナガ「……いや、朝にこんな人いるの初めてだけど」
キムラ、モリノ、オダ、全員笑顔でメイにアピールしている。

○走るタクシーの車内

タイトル【時効まで、あと１５日】
橋上から話を聞く勝村。
勝村　「お話は以上です。ありがとうございました」
橋上　「……」
勝村　「あ、あとひとついいですか？」
橋上　「なんでしょう」
勝村　「亡くなった明神村長は、恨まれていたと聞きます」

橋上　「公然の事実のようなものよ」
勝村　「橋上さんも……恨んでましたか？」
橋上　「私は別に。ただ強欲で、偉そうな態度で、村長で神主で、そして愚かだったわ。この小さな村の権力者で王様。……きっと、裸の王様だったんでしょう」
勝村　「具体的なエピソードとかあります？　その、恨みの」
橋上　「殺し文句は『水を止めるぞ』でしたね」
勝村　「水？」
橋上　「農家にとって水は命でしょう？　それを止めるって脅すのよ」
勝村　「止められるんですか？」
橋上　「村長は、村の水門を開け閉めする権利があるの」
勝村　「（メモを取る）」

○小さな水門の前

棚田が眼下に広がっている。
水門のハンドルをいじってみる白井と
勝村。
白井　「手で開け閉めできそうですけど」
勝村　「物理的に水を止めるんじゃなくて、
たとえば村八分にすることを『水を止める』
みたいに言ってたのかも」
白井　「なるほど」
向こうに紅い椿が咲いている。
勝村　「椿！」
白井　「早咲きのがたまにあります。冬はこ
の辺は満開ですね」
勝村　「へえ」
白井　「ここは窪内村といいますが、元々は、
首落ち村と呼ばれていたそうです」
勝村　「くび……おち？」
白井　「椿は首ごとポトリと落ちるので、不
吉とされましたからね」
×　×　×
回想。タクシーの中の保坂。

保坂　「この村は、もともと平地で生きられない弱いやつらが山に逃げ込んでつくった村よ。廃れていくのも当然よね。でも昔、落武者の首を狩ってたらしいわよ。だから首落ち村。椿の下には首なし死体が埋まってて、その恨みで血の色になって、花が首ごと落ちるそうよ」

×　×　×

タイミングよく、椿が首ごと落ちる。

ビビる勝村。

○下田の家、庭

下田　「見てくださいよ。ニラ農家の土地にスイセン生やすわけないでしょうに。見たら引っこ抜きますよ」

下田の案内で、スイセンがないかを確認した勝村、白井。

下田　「まったく、お客様にひどいことをする人がいたもんだわ」

勝村　『『この件に触れるな』って誰かの警告かな、なんて思ってます」

下田　「そんなことありませんよ。私だってこうして捜査協力してますし」

勝村　「あ、……では、その件でひとつ」

下田　「？」

勝村　「村長はキリのようなもので、手を無数に刺されていました」

下田　「はい。聞きました」

勝村　「ところが左手のほうが傷が多かったんです。心当たりあります？」

下田　「（首をかしげる）……なぜでしょう」

勝村　「……ありがとうございました。以上です」

○走るタクシーの車内

勝村　「私の勘ですが、容疑者は三人います」

白井　「えっ、もう犯人分ったんですか」

勝村　「犯人じゃないですよ。あくまで『怪

しい』だけです」

白井　「その三人とは」

勝村　「下田さん、橋上さん、保坂さん」

白井　「……女性？　私はてっきり男だと思ってました。どうして？」

勝村　「『左手に傷が多かった理由』を、全員に尋ねました」

白井　「ああ、はい」

勝村　「村長は左利きだったんです。それは村の人なら全員知ってたこと。恨まれていたことも公然の事実なので、『利き手だから刺されたのでは』と考えるのは当然でしょう？　ところが、あの三人は」

×　×　×

フラッシュ。

下田　「……なぜでしょう」

保坂　「さあ？　自分で刺したんじゃない？　ガハハ」

橋上　「……分りません」

×　×　×

勝村　「意図的に隠したか、無意識に避けたか」

白井　「犯人はもう死んでるか、この村から引っ越したかも知れません」

勝村　「それも勿論あります。真犯人が『左利きだから刺されたんだろ』と無邪気なふりをしている可能性もあります」

白井　「……確かに」

勝村　「確かなのは、彼女たち三人が、答える前に少し間を取ったことですね」

白井　「間？」

勝村　「とっさに考えたんじゃないかしら」

○赤い橋の上、霧の中

橋上と下田が立ち話をしている。

そこに杖をつきながら、保坂がやって来る。二人で話している様子を見て、慌ててやって来る。

保坂　「ちょっとアンタたち、勝手に話始め

ないでよ。何か隠し事するつもりじゃない
でしょうね？」
橋上　「そんな訳ないじゃないの。私たちは
三位一体よ？」
保坂　「そうならいいんだけど」
下田　「隠し事なしでいきましょうよ」
橋上　「では確認を。下手なこと、あの刑事
に喋ってないでしょうね」
保坂　「当然じゃない！　あと二週間、何ご
ともなく東京へ帰って貰いましょうよ」
橋上　「白井さんは刑事につくのかしら」
下田　「どっちでもないんじゃないかしら。
中立な立場に見えます」
橋上　「お互い、何も喋ってない、と確認し
ます。よろしい？」
下田　「(うなづく)」
保坂　「勿論」
下田　「じゃあ、誰よ？　スイセンの葉なん
かニラに混ぜたの？　あんたたちじゃない
でしょうね？　目つけられたらどうするの

よ？」

保坂　「そんな訳ないじゃない」

下田　「私一人を逮捕させて、自分だけ逃げようたってそうはいかないわよ。そしたら洗いざらい喋るから」

橋上　「下田さん落ち着いて。我々は三位一体」

下田　「……白井さんは、あんな女の相手、よくしてるわよ」

保坂　「あの人運転丁寧で信頼できるわよね。荷物も持ってくれるから好きよ」

橋上　「……あと１４日。それまでおとなしいババアでいること。そうしたら、晴れて我々はただのババアに戻れる」

保坂　「どっちにしてもババアね」

下田　「ただのババアのほうがましね」

霧の中から農家の人が現れる。

三人とも笑顔になって挨拶する。

○松風荘、共同キッチン

洗い物をしているメイ。
キムラがのそっと現れる。
キムラ「トミナガさんは？」
メイ　「撮影でかけた。滝壺に魚釣り」
キムラ「メイちゃんさ、YouTubeとかに興味ある？」
メイ　「え、まあるっちゃあるけど」
キムラ「俺も機材整えてんの。見に来る？」

○キムラの部屋を廊下から見る

廊下から覗くだけのメイ。
沢山のモノが散乱していて、汚い。
美少女エロ系フィギュアなど、女子がドン引きするようなものだらけ。
キムラ「ホラこれ、耳元で囁いているように録れるマイク。AMSRって知ってるよね。メイちゃんの声をこれで録ったらエロイよね」

メイ　「ああ……うん、そういうの興味ないんで」

扉があき、モリノが出てくる。

モリノ「メイちゃん俺のコレクション見る？　アニメと特撮ばっかだけど」

メイ　「あ……それもいいです」

階段を下りると、オダがカメラを構えている。

メイ　「え、なんですか、やめてくださいよ」

オダ　「俺盗撮系 YouTuber 始めたんだよね。昨日の夜はお楽しみでしたね。ここの壁薄いからさ。丸聞こえなんだよ。俺ら悶々としちゃってさ。協力して盗撮することにしたの。動画見る？」

メイ　「は？　なんの話よ」

オダ　「メイちゃんの喘ぎ声エロすぎんだよね。とくにバックの時」

メイ　「……」

オダ　「今トミナガいないんでしょ？　俺とやろうよ。俺セックスウマいんだよ」

メイ　「あの、私そういうんじゃないんで。
カメラもやめてください」
オダ　「しゃぶれよ」
オダはズボンを下げる。
メイ、逃げる。

○森の中

メイ走って逃げる。
追いかける三人。
キムラ「メイちゃん！　待って！」
モリノ「メイちゃん！　オダは言い過ぎだよ
！」
オダ　「メイちゃん！　メイちゃん！」
メイ、必死で走る。

○走るタクシーの車内、夜

電話を切った勝村。
勝村　「……白井さん、すいません、村に今

から戻れます？」

白井　「何かあったんですか？」

勝村　「トミナガさんから県警に捜索依頼があって、私も人足として手伝ってくれないかと」

白井　「捜索？」

勝村　「トミナガさんの彼女が戻らないって。荷物もケータイも置きっぱなしで、松風荘の住民とトラブルがあったらしくて」

白井　「もし山にいるなら、イノシシが出ることもあります。知らない道なら滑落の危険も」

Uターンするタクシー。

○森の中、夜

懐中電灯片手に探す県警、勝村、白井。

それをカメラで撮るトミナガ。

勝村　「ちょっとアンタ本気で探す気あるの？　何カメラで撮ってんのよ！」

トミナガ「これ、暗視カメラ付いてるんス」
勝村　「あ……知らなくて、ごめんなさい。
何かあったら声で知らせて」
トミナガ「ウス」
警官の声「いたぞー！　生存ー！」
振り返る一同。

○神社の祠、夜

祠の中で、隠れるように眠っていたメイ、まだ寝ぼけている。
メイ　「ん？　あれ？　何？」
トミナガ「メイ！　家出なんかしてんじゃねえよ！」
メイ　「あ、ダーリン！　あれ？　ケータイ忘れてきた？」
×　×　×
保護されたメイ、警察に事情を話している。
勝村　「使われていない祠で隠れてるうちに

眠ってしまったって、小学生のかくれんぼじゃないんだから」

白井　「とくにここは２５年使ってなかったわけですし」

県警が勢いよく扉を閉めたら、壊れてしまう。

慌てて蝶つがいをはめようとして懐中電灯で照らすと……

警官　「おい、なんだこれ？」

もう一人が覗き込み、扉を開ける。

大量のキリが、がらがらと出てくる。

勝村　「キリ……？」

思わず走り寄る。

勝村　「そのまま、触らないで！　鑑識に回して！」

○市役所、資料課

過去帳を見る勝村。

昔の地図をコピーする白井。

勝村　「村長死亡当時の村の人口は三千人、現在は百七十人……」

白井　「勝村さんは、犯人がいるとしたらまだ村の中に住んでると思います？」

勝村　「分りません。隠れ住むには最適だけど」

勝村に着信。

勝村　「はい。……（落胆する）そうですか。ありがとうございました」

白井に。

勝村　「鑑識の結果。不特定多数の指紋跡しか出なかったそうです。血液反応とか出れば、何か情報が増えたはずなんですが」

白井　「……捜査は振出しですか」

勝村　「手がかりは、ゼロじゃないです」

タイトル【時効まで、あと１２日】

○走るタクシーの車内

出口（６５）に話を聞く勝村。

出口　「……（挙動不審にきょろきょろと車内を見渡す）」
勝村　「どうしました？」
出口　「この車、盗聴器とかついてねえよな？」
白井　「ドライブレコーダーは音声を切ってあります。記録は、勝村さんだけです」
出口　「……白井さんがそういうなら信用するよ。……俺がしゃべったって言わないでくれよ」
勝村　「勿論です。守秘義務は守ります」
出口　「抜けがけは、『水を抜かれる』からな」
勝村　「それ本当なんですか？」
出口　「実際には見たことねえよ。抜け駆けさえしなきゃ、みんなで協力するいい村だよ」
勝村　「……で、話というのは」
出口　「俺がこの村に来たのは……二十六年前。つまりこの村ではまだまだ新人さんだ。この車の中なら、本当のこと言ってもいい

かなって思ったんだ」

勝村　「それは」

出口　「実は俺、見たんだ」

勝村　「……？」

出口　「事件当日の夜。村長の家に入る――
保坂さんを」

勝村　「えっ」

出口　「昔は保坂さんも体型はスリムでね。
でもあの赤い肩掛けは絶対保坂さんだ。橋
の上から、村長の家に入るところを見た。
あの夜は雪がちらついてて、両手の上に椿
の花をこう持ってて……」

×　×　×

イメージ。

雪の降る中、赤い椿の花を両手に乗せ、
村長の家に入る保坂（痩せていた）。

×　×　×

出口　「村長の愛人、って噂も聞いたぜ」

勝村　「愛人？」

○赤い橋の上

橋の上から村長の家を見る白井、勝村。
崖の上で、やや遠い距離。

白井　「この橋の上からだと、保坂さん本人かどうか、顔がわかる距離じゃないですね」

勝村　「……本人でない証拠もないし、別人である意味も分からないし。村長の愛人だったというのも初耳」

白井　「一人ひとりに聞いて回りますかね？」

勝村　「……（歩き出す）ご本人に、直接聞いたほうが早いかと」

白井　「保坂さんの買い物の日は、三日後です」

勝村　「重要参考人が浮上したのよ？　直接伺いましょう」

○保坂の家

保坂　「どうもお。悪いわねウチまでわざわ

ざ。行ってくれれば出向くわよお、って言いたいけど、これ（杖）じゃあねえ。今お茶淹れるわねえ」

歩きにくそうにしながら台所の戸棚を開ける。

勝村　「いえ、あの、お構いなく。手伝いましょうか」

保坂　「いいわよう。次いつお客さんが来るか分からないから、取って置きの湯呑みだすわね」

高そうな湯呑みに茶を淹れる保坂。

×　×　×

保坂　「（茶を飲んで）おいしいでしょ？」

白井　「これ、いつものスーパーですか？」

保坂　「産地、見てる？」

白井　「どういうことです？」

保坂　「このお茶、長野産の茶葉と、静岡産の茶葉の時があるの。静岡産のやつを私は狙って買っておいてあるわけ」

白井　「知りませんでした」

保坂　「ガハハ。ババアの知恵よ」
勝村　「……（黙って茶をすする）」
保坂　「東京のお口には合わないかしら？」
勝村　「……本題を話します。２５年前の事故。当日の夜、保坂さんが村長の家に入るのを見たという証言がありました」
保坂　「……誰よ、そんなデマ流すの」
勝村　「デマかも知れませんし、本当かも知れません。また保坂さんと村長は、個人的な関係があったとも」
保坂　「ハア？　ババアとジジイで何するってのよ！　変な目で見ないでよね！　私あの村長嫌いだったんだから！　虫唾が走る！」
勝村　「彼の両手は、キリのようなもので、大量の穴が開けられていました」
保坂　「何度も聞いた話よ。何故だか左手のほうが多かったんでしょ？」
白井　「……（保坂と勝村を交互に見る）」
勝村　「神社から出た大量のキリは、何に使

われていたんでしょう？」

保坂　「昔はみんなで冬に蓑を作ってたのよ。藁は大量に余るし、村の現金収入にもなったし、その道具よ。ずっと使ってなくて、なにせ……」

勝村　「血液反応が出ました」

白井　「（驚き、勝村を見る）」

保坂　「……」

勝村　「Ｏ型と、ＡＢ型。目に見えないけど、血液成分は残っていたようです」

保坂　「……」

勝村　「Ｏ型は村長のもの。村でＡＢ型はごくわずか。保坂さんもそうですよね？」

保坂、茶筒を倒し、湯呑みを床に落とす。高価な湯呑み、割れる。

勝村　「え？　あ（慌てて拾おうとする）」

保坂、すっくと立ちあがる。

勝村、白井「え？」

保坂、そのまま走り出して、扉を開けて逃走。

勝村、白井「は？」

勝村　「足悪いんじゃないの？」

白井　「ずっと私はそうだと……」

椅子に立てかけてあった杖が、カタンと床に落ちる。

勝村　「ずっとそのふりを？」

○村の道

全速力で走る保坂。

保坂の家から出てくる勝村、白井。

勝村は走って追いかける。

白井はタクシーに飛び乗り、発進。

勝村に追いつき、扉を開ける。

勝村、飛び乗る。

保坂、くねくね曲がる舗装路をショートカットして走る。

車は舗装された曲がる道しか走れない。

白井　「くそ！　向こうのほうが道を分ってる！」

保坂、振り返り、車の二人を見る。
道のない森の中を走り出す。

○森の中

走る保坂。
走って追いかける勝村、白井。

白井　「保坂さん！」

保坂、振り返らずに全力で走る。
勝村も白井も慣れない山道。
保坂は山菜採りのように身軽に走ってゆく。
姿を見失い、立ち止まる勝村、白井。
息を切らせた二人。
勝村、無闇に走る。誰の姿も見えない。

勝村　「……くそっ！」

○翌朝、滝壺

滝壺に、保坂の水死体があがっている。

イタチと同じように。
警察や消防が出動して、回収している。

○滝の上の現場検証

足を滑らせた痕がある。

白井　「誰かに突き落とされて殺されたってことは？」

勝村　「保坂さんは村人も含めて全員をだましていた。足の悪い老人だと。何のために？いざというとき、逃げるため？　その一生に一回の時に、都合よく待ち伏せて突き落とせる人がいて？」

白井　「……たしかに……」

勝村、立木に額をこすりつける。

勝村　「……『血液反応が出た』と言ったのは、嘘なの」

白井　「……やっぱり」

勝村　「ハッタリをかませば、何か出ると思った。左手のときみたいに」

白井　「……」

勝村　「まさか走れるなんて。完全に私のミス……完全に私のミス……！」

はげしく後悔している勝村。

立木に額を打ち付ける。額が傷つき、

血がにじむ。

白井　「……」

タイトル【時効まで、あと１１日】

○村長の家の庭、葬式

神式と仏式の折衷みたいな、部外者から見ると異質なスタイルの葬式。

参列する村人たち。橋上、下田。

少し離れて出口。トミナガも参列。

勝村、白井。市の担当として八ヶ岳も。

勝村は、額の絆創膏がかゆくてイライラしている。

白井　「あの崖の先には、西垣村という村がありました」

勝村　「ありました？」
白井　「限界集落を下回って、廃村になったと聞きます」
勝村　「人が住んでいるより、身を隠すには都合がよかったのかも。時効の日まで、あと十日生き延びれば、だけど」
白井　「事件に関与してたんでしょうか」
勝村　「キリのことについては、何か知っていたはず」

笑顔の保坂の写真。

×　×　×

出棺後の片づけをしている中、橋上とトミナガがもめている。
橋上　「絶対許しません！　あなたそれがどういうものか知ってるの？」
トミナガ「なんでだよ！　俺はこの村のことを考えて、いっちょ企画しよう、って言ってるだけなんだぜ？」
橋上　「この村のことを何も知らない癖に！」
トミナガ「何もかも草生やして消えていくつ

もりかよ！」

殴り合いそうな二人を皆が止めている。

落ち着く二人。

橋上　「……とにかく、祭りは復活させません」

トミナガ「……アンタがこの村代表じゃねえだろ」

それを遠巻きに見る白井、勝村。

白井　「あの物静かで冷静な橋上さんが珍しい」

勝村　「……祭り」

○赤い橋の上、霧の中

橋上　「ほんとうに愚かなババア。あと十日くらい我慢できなかったのかしら。あの刑事から走って逃げたんですって。あの女、走れたのよ。私たちを騙してたの」

下田　「あなたこそ、祭りの件であんなに声を荒げなくても。目を付けられるわよ？」

橋上　「……」
下田　「ニラにスイセン入れたの、あなたじゃないでしょうね」
橋上　「私に何のメリットがあるのよ。自分でやっといてかわいそうな被害者面してるんじゃないでしょうね？」
下田　「はあ？」
橋上　「……祭りなんて、復活させてやるものですか」

○市役所、外観

○同、資料課

タイトル【時効まで、あと９日】
白井が現れる。
新聞を読んでサボっていた八ヶ岳。
八ヶ岳「私に用……じゃなくて、こっち（棚）のほう？」
白井　「窪内村の、昔の資料を探しています」

八ヶ岳「人死にがあっちゃあ、あの刑事さん
あきらめるかと思ったが」
白井　「お祭りの資料はありますか？」
八ヶ岳「祭り。もうずいぶん前から、窪内村
の祭りは廃れてたよ」
白井　「それ以前の新聞とか当たればいいで
すかね」
八ヶ岳「……あの棚かな（顎で指す）」
白井　「ありがとうございます」
棚へ向かう白井。

○走るタクシーの車内、夕

白井　「かつての村祭りは、毎年冬の入り、
十二月一日に行われていることが分りまし
た」
勝村　「……村長の亡くなった日」
白井　「それで、気になって調べてみたんで
す。もともとは椿の種を収穫して、椿油を
つくる祭りだったそうです。村にとって豊

作祭りだったんでしょう。かつては縁日や火祭りでにぎわったそうですが」

勝村　「火祭り」

考える勝村。窓をあけて風を入れる。

勝村　「……私は思い上がってたと思うんです。ドラマみたいに、人の心理の裏を突いた気になってた」

白井　「保坂さんの件は予測不能で、我々には不可抗力です」

勝村　「真犯人が保坂さんで、この一件はやぶの中かも知れない」

白井　「……」

勝村　「……」

白井　「勝村さん、犬、お好きですか？」

勝村　「はい？」

白井　「犬アレルギーとかそういうのでなければ、ウチの犬がご挨拶したいと前から言ってるので、ウチに寄ってきませんか」

○郊外の一軒家（白井の家）、薄暮

タクシーから降りた勝村、白井。
迎える白い犬。
白井　「サヤカ！　サヤカ！　よーしよーし、
勝村さんにご挨拶を！」
サヤカ「わんわん！」
白井　「サヤカは死んだ女房の名前です。一
人じゃさみしいので、その名前と暮らそう
かとここに来て飼い始めまして」
勝村　「……あの、サヤカというのは……」
白井　「勝村さんの下の名前ですよね？　最
初に警察手帳見た時に気が付いたんですが、
言い出すタイミングがなくて。犬の名前と
同じだって聞いたらご気分を害するかも、
と思いまして」
勝村　「……」
サヤカの頭を撫でる。
勝村　「いい子だ。サヤカ」
白井　「はー、これで胸のつかえが取れた」
勝村　「そんなこと、気にしてたんですか？」

白井　「私にとって、サヤカは大事な問題なので」

勝村　「……」

白井　「あ、お茶でも淹れましょう」

鍵の無いドアを開ける。

勝村　「え、鍵とか」

白井　「このへんはみんなこうです。鍵をかけるほうが珍しい」

○同、中

お茶を飲む二人。勝村はサヤカの頭を撫でながら、ぽつりぽつりと話す。

勝村　「いじめがあったんですよ。私が小学校三年の時。私、見てられなくて」

白井　「その頃から、正義の味方だったんですね」

勝村　「……話はもっと複雑です。私こんな性格なんで、いじめっ子のボスみたいな奴に食ってかかったんです。『いじめなんて

卑怯だろ！』ってね。それでいじめは止んだんです」

白井　「目に浮かびます」

勝村　「でも次の日から、私がいじめのターゲットになったんですよね。いじめられてた谷田さん……私が助けた子も、いじめる側に回るようになったんです。その子、何て言ったと思います？」

白井　「……」

勝村　「『ざまあ』って」

白井　「……」

勝村　「私が得た教訓は、一人で戦っても正義をなせないということです。正義は組織で実現しなければならないんです。だから私、警察に入ったんです」

白井　「……私は組織が嫌になって、一人になった。真逆ですね」

棚の上の、妻サヤカの遺影。

白井　「彼女はずっと海を見に行きたいって言ってました。海なし県の埼玉出身なので、

海が珍しかったんでしょう。でもここ長野も山に囲まれてて、海には縁がないです」

勝村　「どこへでも行ける車に乗ってるのに、どうして行かないんですか？」

白井　「……考えたことがなかったです。……規則的に生きることで、自分を縛って保ってたんでしょうか。手袋をしないと自分に戻れない。そんな風に心を閉じてきたんでしょうか」

お茶が切れたので、もう一杯淹れようと立つ。

白井　「あの時不正経理と闘ってたら、と今でも時々考えます。この件の解決は、だから私の問題でもあるんです」

勝村　「……」

白井　「（不器用に笑う）」

○村長の家の前、カメラの映像

YouTubeを収録中のトミナガ。

トミナガ「ハイ限界！　今日の『限界暮らし』は、廃墟探検！　元村長の家に幽霊が？　出たら面白いよね！　もーう限界！」

〇村長の家、中、カメラの映像

トミナガ「（埃で咳）やべーよここ。なにあれ？」

両面宿儺像に気づく。

トミナガ「仏像？」

頭を撫でる。

カメラは奥の物置に。

トミナガ「ぜってえお宝あるっしょここ！」

つづらがたくさん積んである。

その一つを開けると、錆びた南京錠がたくさん入っている。触ってみる。

トミナガ「なにこれ？　鍵ねえじゃん」

次のつづらを開ける。たくさんの油壺。

トミナガ「ん？」

壺の封を解く。黄金の油が入っている。

なめてみる。

トミナガ「これは青酸カリ……じゃなくて！

椿油じゃね？　前作ったやつと似てるし、

プロがつくる味っぽいし！」

〇松風荘内、トミナガの部屋、カメラの映像

油炒めが出来上がっている。

トミナガ「で！　椿油で炒め物！」

食べる。

トミナガ「うま！」

しばし食べる。

×　×　×

カメラは置いてある。

油壺を見て。

トミナガ「これ、夜に使いたいんだけど」

メイ　「？」

トミナガ「ヌルヌルにできるんじゃないかと」

メイ　「天才か」

○同、夜

事後の二人。

全裸でテカテカ、放心状態。

トミナガ「これやべーわ」

メイ　「ヤバイしか出ない」

タバコ吸いながらスマホをチェックするトミナガ。

トミナガ「ん？」

メイ　「何？」

トミナガ「(見せる)」

メイ　「……ヤバイ」

トミナガ「でしょ。行ってみるべ」

スマホ画面。

画面　「K村のGのハッパ結構モノが良かったのに、売人逮捕されたらしい」

画面　「庭に埋めてあるって聞いたけど誰か凸して」

画面　「凸！　凸！」

○合田夫婦の家、庭、夜

大きな木の根元を掘り返したトミナガとメイ。

瓶に入った大量の乾燥大麻ゲット。

○松風壮、トミナガの部屋、夜

事後の全裸の二人。

メイ　「……これはヤバイね。みんなやめられなくなるの、わかる」

トミナガ「すぐクスリで乱交パーティーやりたがるのも分るわ。あ、隣のやつらどうせたまってんだから、乱交パーティーやろうぜ！」

メイ　「あいつらの相手はやだ」

トミナガ「じゃネットで集めようぜ！　祭りの内容決まった！　大麻乱交ヌルヌルパーティー、火祭りもやるよ！　動画撮ってあとでモザイクかけて売るべ！」

○走るタクシーの車内、松風荘の前

タイトル【時効まで、あと7日】

窓の外には、手をつないで歩くトミナガとメイの姿が見える。

二人はペアルックを着ている。

白井　「……あっ」

勝村　「？」

白井　「ニラとスイセン！」

勝村　「？」

白井　「赤い橋の上で目撃された保坂さん、別人だったってことあります？」

○赤い橋の上

白井が保坂によく似た服を着て、村長の家の前に立つ。

勝村、それをスマホで写真に撮る。

×　×　×

その写真。

勝村　「確かに、誰でもわからないっちゃあ分からないか。でも何のために？」

白井　「下田さん、または橋上さん、ってことありますかね？」

勝村　「何のために？」

白井　「……それも分りません。でも先入観を覆さないと」

勝村　「……今から市役所の資料課、いけますか？」

白井　「もちろんです！」

○資料課

戸籍を調べる勝村。

○走るタクシーの車内、街道沿い

白井　「おや？」

タクシーを止める。

○小さなパン屋の前

シャッターの下りた店。

貼り紙「閉店　この土地に根付いて六十余年、ご愛顧有難う御座いました。店主の体力の限界につき、引退させて下さい。この一帯は再開発され、老人ホームとなります。きっと長めの良いホームになるでしょう　店主」

白井　「閉店……」

あたりを見回す白井。たしかに周囲の家は空家で、駐車場だらけになっている。

白井　「下田さん、悲しむなあ……」

○走るタクシーの車内、街道沿い

下田を乗せて走っている。

（勝村は乗っていない）

白井は不意にウインカーを出し、街道から逸れる。

下田　「？」

白井　「ああ、すいません下田さん。今日は例のパン屋、寄れません」

下田　「ええ？　どうして？」

白井　「この先に道路工事があって、しばらく通行止めなんです」

下田　「ええー。そうなの。残念だわ。パンの分、お腹すかせてあるのに」

白井　「じゃあ、この先の蕎麦屋に寄りましょう。立ち食いですけど。蕎麦屋にはダンナさんとの思い出はあります？」

下田　「とくにないわ」

白井　「……あ、でも結構おすすめですよ山菜そば」

○新しめのチェーン店の、立ち食い蕎麦屋

山菜そばを食べる白井、下田。

下田　「あら」
白井　「悪くないでしょ。長野の人はそばうるさいから」
下田　「そうね。名産品ですものね」
白井　「……？」
下田　「？」
白井　「どうして村では、そばつくってないんですか？」
下田　「？　……何故かしら」
白井　「……」

○市役所、資料課、夜

大量の資料を調べて、疲れ切っている勝村。
そこに白井がやってくる。
白井　「何か分りましたか」
勝村　「今日は別行動では？」
白井　「気になったんです。何故村ではそばを作っていないのか。椿油がメインだった

としても、冷害に強いそばは農家の救世主と聞きます。あんなに霧の強い村で、そばを作らない理由がない」

勝村　「……（起き上がる）昔からそば農家があったかは、過去帳で調べられる」

白井　「勝村さんの成果は？」

勝村　「村長が神主の家系だとして、巫女の家系がないかと疑問に思ったんです。昔は祭りが盛んだったとして、毎回バイトを雇っていたわけでもないでしょうし」

白井　「……たしかに」

勝村　「巫女の家系が三つありました。下田家、保坂家、橋上家です」

白井　「……何か、ありますね絶対」

勝村　「そば農家の件は気になります。調べましょう。いや、でも……」

白井　「？」

勝村　「時効までに、間に合うかどうか」

白井　「まだ5日あります。それまでに犯人が分れば」

勝村　「違うんです」
白井　「？」
勝村　「ドラマとかでよく勘違いされてるけど、時効ギリギリに逮捕すればＯＫじゃないんですよ」
白井　「え？」
勝村　「逮捕して、検事が裁判所に起訴するまでが、時効の締め切りなんです」
白井　「どれくらいかかるんですか」
勝村、二本指を立てる。
勝村　「一番速かったので、二週間」
白井　「……」
勝村　「一週間あれば例外的になんとかなるかと思ってましたが、保坂さんが亡くなった時点で一週間。……たぶん、何をどうしても間に合わないと思います」
白井　「……え、じゃあ、あきらめるんですか」
勝村　「……」
白井　「勝村さんの正義って、それで終わり

ですか」

勝村　「終わりも何も、逮捕できても意味ないし」

白井　「逮捕だけが正義じゃない。真実を白日の下にさらすのも、正義だ。私はそれを怠った」

勝村　「……」

白井　「私はぎりぎりまで粘りたいです。……乗りますか、乗りませんか」

ガチャリと扉が開いて。

警備員「あれ、もう終わりですよ」

二人同時に「もうちょっとだけいいですか？」

二人、顔を見合わせる。

○走るタクシーの車内

タイトル【時効まで、あと４日】

村人から話を聞く勝村。

○早咲きの椿の前

タイトル【時効まで、あと３日】
村人から話を聞く勝村。

○走るタクシーの車内

タイトル【時効まで、あと２日】
村人から話を聞く勝村。

○走るタクシーの車内

タイトル【時効まで、あと１日】
白井と勝村の二人。

勝村　「……」

白井　「……」

勝村　「明日の最終を予約しました。それでいったん東京に帰ります。お付き合いありがとうございました。また休暇が取れたら、来るかも知れません。その時は、もう刑事じゃないかも知れませんが」

白井　「……力及ばず、済みませんでした」
勝村　「夕方、みなさんに集まってもらおうと思っています」

○村長の家の庭、夕

皆に話をする勝村。
丁寧に頭を下げる。
下田は思わず笑みを浮かべる。
橋上、下田をきつく見る。
下田、あわてて無表情に戻る。
勝村、ポケットから白いハンカチを出し、白旗代わりに振る。

○ビジネスホテル、勝村の部屋、夜

荷物をまとめている勝村。
壁に貼った村の地図や手がかりの写真、メモ、村人たちの写真などをはがし始める。

×　　×　　×

ベッドに寝転がる勝村。
スマホをなんとなく見ている。
ふと思い出し、あるページを。
トミナガの『限界暮らし』。
村に来たころの勝村が映っている。

勝村「……（苦笑い）」

最新の廃虚探検回を見る。
そこに映る大量の南京錠。

勝村「……（指で止める）」

机の上に散らばった地図や資料。
白井のつくったリスト。
赤のマーカーで線を引き始める。
時計を見る。深夜三時。

勝村「今から白井さんを呼び出すのは……」

上着をひっかける。

○村、水門の前、深夜

（普通の）タクシーに乗ってきた勝村。

地図と村と水門を見比べる。
そこの畑は放置状態。

○同、別の水門、深夜

同様に確かめる勝村。
そこの畑も作付けなし。

勝村　「この辺を見渡せる場所は……」
辺りを見回す。村長の庭の物見の塔。

○村長の庭、物見の塔、夜明け

手をかけ、一段ずつはしごを登る勝村。
取っ手が崩れ、落ちる。

勝村　「くそ！」
今度は足をかけたところが崩れる。
地面に落下、ひどく体を打つ。

勝村　「……」
手に持った地図や資料が散乱。

勝村　「負けるか！」

額にずっと貼っていた絆創膏をビリッとはがす。
懸命に上り、ついに一番上に到達。
東の空から太陽が昇ってくる。
村全体を見渡す勝村。
勝村　「……やっぱり、そうか」
タイトル【本日、時効】

○走るタクシーの車内

橋上を乗せて走っている。
白井に電話がかかってくる。
白井　「荷物が残されたまま、どこへ行ってたんですか？」
電話の声（勝村）「廃棄したそば農家たちのリストと、水門の関係を調べました。リストをつくってくれた、白井さんのお手柄です」
白井　「……どういうことです？」
電話の声（勝村）「その農家たちは、橋上さ

んの下流の水門の水路の農家ばかりでした。
そして、村長の家からは水門の鍵が消えている」

白井、後部座席の橋上が気にかかる。

電話の声（勝村）「……（電波が途切れる）」

白井「あれ？　もしもし？　もしもーし！」

リダイヤルしてもつながらない。

橋上「あの刑事の方？」

白井「あ、そうなんですが……」

橋上「村に入ったからかしらね」

白井「はあ……」

橋上「……」

白井「……」

橋上「……」

白井「あっ」

橋上「何かしら？」

白井「ひとつ質問をしていいですか？」

橋上「？　どうぞ」

白井「水門の鍵は、橋上さんが持っているのでは？」

橋上　「……」

タクシーは橋上の家に着く。

橋上　「上がって。美味しい紅茶を御馳走するわ」

○橋上の家、玄関

扉を開けて入った白井。

その裏に、鍵が沢山かかっている。

驚く白井。

橋上　「それが水門の鍵」

白井　「廃業したそば農家は、ことごとく橋上さんの近くの水門から流れる水路を利用してた家。……あなたが水を止めたんですか？」

橋上　「……よく調べたわね」

白井　「つまりあなたは、村長の権力が欲しかった。それが動機じゃないですか？」

橋上　「たった一枚の扉の向こう。あなたは何があるかさえ知らない」

白井　「……」

橋上は家の中へ。白井は続く。

品のいい洋間が広がっている。

○橋上の家、リビング

紅茶を頂く二人。

橋上　「あのそば農家たちはね、村の秩序を乱す言動が多かったんです。私は村のために対価を払って頂きたかった。廃業して出て行ったのは、彼らの意志よ」

白井　「……村長は、あなたが刺したんですか？」

橋上　「……どこから話しましょうかね」

遠くを見る橋上。

橋上　「橋上家、保坂家、そして下田家。この三家は代々、明神家の巫女の家系なんです。かつては村祭りが毎年十二月一日にあって」

白井　「明神村長が、死んだ日」

橋上、うなづく。

橋上　「椿油の豊作を祝う日。早咲きの椿で、巫女が花を添えるの。あの日は、雪がもうちらついていたわね」

×　×　×

イメージ。

雪の中、椿が乗せられた両手。

×　×　×

橋上　「かつては火祭りも盛んで、村中が参加して、その日だけは無礼講。つまり誰とまぐわっても許される日。多くの子供が祭りで生まれるという、本当の豊作祭りなんです。そうして小さな村は、人口を維持してきたのでしょう。ところが過疎になり、祭りもなくなる。だけど『豊作の儀式』だけは細々と伝承されていたんです」

白井　「……豊作の儀式」

橋上　「村長の夜のお世話を、巫女たちが行います。そこで種付けが行われて、村は増えるのです」

白井　「……それって……」

×　×　×

フラッシュ。２５年前。

村長の家の中。村長（７０）の前で、橋上（６０）、保坂（５８）、下田（５５）が、服を脱ぐ。

村長　「今年一番搾りの、椿油」

壺から黄金の油を掬い、彼女たちの体にかける。

月明りに照らされた、布団の中でまぐわう４人の肉体。油にまみれている。

×　×　×

橋上　「濡れもしないババア三人を、村長は毎年毎年抱き続ける。いい加減この風習を辞めましょうと我々が言うのは、自然な流れでしょう？」

キリを構える格好をする橋上。

橋上　「こんな儀式、何の意味もないわ。もうやめにしませんか。――私たち三人は、ミノカサ用のキリで、村長を脅したんです」

×　　×　　×

フラッシュ。

キリを持ち、村長に迫る三人。

×　　×　　×

橋上　「村長を脅して終わりの予定でした。でも彼は抵抗した。だから三人で押さえつけて、何度も何度も手を刺したんです。私を触った憎いその手を」

×　　×　　×

フラッシュ。

押さえつけられ、手を刺される村長。

逃げる。庭に停めてあった車に飛び乗る。

キリをもって追いかけてくる三人。

×　　×　　×

橋上　「そのあと事故を起こすかどうかまで、私たちは予想しなかった。仮に殺意ある行動だったとしても、もう時効なんでしょう？　……殺意。……ありましたとも。死んで欲しいと、何度も何度も突き刺しな

がら願いましたよ」

白井　「……」

橋上　「暗闇の中で誰に種付けしたか分らなくする為に、三人の巫女は事前に服を交換するならわしでした。誰でもない、三人の巫女になるために」

×　×　×

フラッシュ。

雪の中で椿を持った両手。

それは、保坂の服を着た橋上。

×　×　×

橋上　「これで全てです」

一息つき、紅茶を飲む橋上。

白井　「……あの……なんというか、……その……」

橋上　「墓場まで持っていけばいいこの話を、何故白井さんにしたのか、不思議に思われます？」

白井　「……はい」

橋上　「あなたはこの村のドライバーとして

よくしてくれたからよ。私の一万円を断ったでしょう？　だから信用できると思ったの」

白井　「信用？」

橋上　「この物語を知ることで、あなたはこの村の一員として認められたの」

白井　「えっ」

橋上　「この真相は、村の皆は全員知ってるのよ？（微笑む）」

白井　「……」

○橋上の家、外

扉を閉め、放心状態で出てくる白井。

車の前に、勝村が立っている。

白井　「……」

勝村　「……どうしたんです？」

白井　「……あなたには、話すべき話だと思います」

○走るタクシーの車内

真相を話し終えた白井。

白井　「……」

勝村　「……（ため息）」

白井　「……一件、落着ですかね」

勝村　「……もう一度、この村に来る必要はなくなったなあ。……今日の最終便の予定は変わらず、で」

白井　「駅までお送りしますよ」

勝村　「……」

白井　「……」

突然、スマホが鳴る。二人、びくっとする。

白井　「（画面を見て）ああ。下田さんのピックアップ」

○走るタクシーの車内、街道沿い

下田、勝村。

白井、ウインカーを出して脇道に入ろうとする。

下田　「またパン屋さんに寄れないの？」

白井　「……あの、まだ道路工事中で」

下田　「何か隠していない？　そんな工事どこでやってるの？　ねえ、パン屋さんに寄ってよ！　刑事さんにもあのパン食べてもらいたいわ！」

白井　「……」

○潰れたパン屋の前

閉店の張り紙を見る下田。

下田　「形あるものは皆壊れる、だから田畑は毎日形を整えて、次の代に渡すのだ、そう父に教わりました」

白井　「……実は、そば屋さんに行ったあと、探したんです」

下田　「何を？」

白井　「ここと同じくらい古いお店なら、ダ

ンナさんと行ったことのある店なんじゃないかって。走りながら色々見て」

下田　「？」

白井　「あのラーメン屋くらい古ければ、多分そうじゃないかと」

○ぼろぼろのラーメン屋の前

下田　「ああ……あああ……。白井さん凄いわ！　どうしてここを知ってたの？　ここよ！　ここ！　うわあ懐かしいわ！」

古い立て看板を触る下田。

下田　「ここのラーメン屋、ものすごく不味いの！」

白井　「えっ」

下田　「あのパン屋さんはダンナの初給料で行ったパン屋じゃない？　ここは二度目の給料日に来た店なの。主人はあまりの不味さに、『二度と来るか！』って啖呵を切って……なんと、それ以来よ！　潰れてなか

ったのね！」

白井　「は、はあ。それは良かったのか、悪かったのか」

下田　「ありがとう！　何十年も前の記憶を取り戻してくれて！　入りましょう！　不味いからお二人は付き合わなくていいわよ！　私は食べたい！」

○同、店内

他に誰も客はいないひなびた店。スープまで飲み干した下田、両手を合わせる。下田、長い時間の黙祷。

白井と勝村は残し気味。

白井　「あの……先ほど橋上さんに呼ばれて、全部聞いたんです」

下田　「……何を？」

白井　「全部です。『豊作の儀式』の全部。あったこと全部」

下田　「そう。……あの女もおしゃべり」

口元をぬぐう。

下田　「もう今日で時効だし、私、誰にも黙っていたことを話しますね」

白井　「……なんでしょう」

下田　「私、ダンナを愛してたんじゃないの」

白井　「えっ」

下田　「私が本当に愛していたのは、村長なのよ」

白井　「……は？」

×　×　×

フラッシュ。

暗闇の中で、村長に抱かれる橋上、保坂、下田。下田だけ喜びの表情。

×　×　×

下田　「勿論ダンナは人並みに愛してはいたわよ。でも本当に心の底から喜びや悲しみが沸き上がるのは、村長だったの。もちろん奥さんもいらっしゃるし、こっちは巫女の家系だしで、大っぴらに想いを打ち明けるわけにもいかない」

白井　「……」

下田　「だから年に一度の『豊作の儀式』、彼に抱かれることは無上の喜びだったの」

白井　「……」

下田　「橋上さんも保坂さんもそれを知らない。つまり私は達成したの。私はあの人を愛していた。抜け駆けの許されない村で、私だけが抜け駆けをしていたのよ？」

白井　「……」

下田　「あの人の手を刺したのはね、他の女を触った手だったから」

×　×　×

フラッシュ。

村長の手を刺し続ける下田。

血に染まってゆく現場。

×　×　×

下田　「私はこの物語を、ようやく手放せる」

○松風荘前、夕

荷物を抱えてやってきたエロいギャルたち。

歓迎するトミナガと引きこもり住民。

派手な音楽がかかり、薪の矢倉に火がつけられる。

皆葉巻状の大麻を吸う。

トミナガ「さあ、祭りの始まりだ！」

瞳に炎が反射している。

○ビジネスホテル、勝村の部屋、夜

トランクを閉めた勝村。

○ビジネスホテルの外、夜

白井のタクシーが停まっている。

トランクを持って現れる勝村。

白井　「最後があのラーメンじゃなんですから、駅の美味しいそば屋に寄りましょう」

○走るタクシーの車内、夜

消防車のサイレンが鳴っている。

白井　「火事？」

白井、無線をオンにすると、消防車の無線が飛び込んでくる。

無線　「全車窪内村へ急行せよ。繰り返す。窪内村で猛烈な火事」

白井　「村で？」

窓の外の遠くを見る。山に赤い光。

無線　「廃屋が燃えている模様。大きな家で、神社ごと燃えている」

目の前を、消防車が通りすぎる。

勝村　「白井さん。あの道なら、村に早く行けます？」

白井　「例のバイパス。はい」

勝村　「この車で消防車を先導しましょう。出来ます？」

白井　「……ダッシュボードを開けてもらってもいいですか？」

勝村、ダッシュボードを開ける。
革の手袋。

○夜の道を走る消防車

に追いつく白井のタクシー。
並走して、窓を開けて消防車に声をかける白井。
消防車のドライバー、うなづく。

○バイパスの入口、夜

立ち入り禁止の看板を吹っ飛ばす白井のタクシー。

○村長の家、夜

猛烈に燃えている村長の家。
マッチを持ったままの下田。
蔵の中の椿油が引火し、さらに燃え上

がる。

○バイパスを飛ばす車の中

白井　「しっかり掴まっとけよ！　なんせ街灯がねえんだ！　いつぶつかるか分んねえぞ！」

と、ガードレールに左前をぶつけて、左のライトが死ぬ。

白井　「くっそ！」

勝村　「大丈夫！　後ろ、ついてきてる！」

消防車は三台に増えている。

月明りしかない山道。

ワインディングは勘で行くしかない。

右前もぶつけ、右のライトも死ぬ。

白井　「くっそううう！」

勝村、ダッシュボードを開けて、懐中電灯を出す。

助手席から身を乗り出し、前を照らす。

勝村　「私が目になる！　左！」

白井　「左！（ウィンカーを出して、ハンドルを切る）」
勝村　「右！」
白井　「右！（ウィンカーを出して、ハンドルを切る）」
勝村　「道なり、まっすぐ！」
白井「オッケー！（バックミラーを見て、消防車たちがついてきていることを確認）」
勝村　「次、左！」
白井　「左！」
木の枝に当たる勝村。払う。
勝村　「右！」
白井　「右！」

○松風荘、乱交パーティー

火を見ながら乱交する若者たち。
けたたましく消防車が通り過ぎる。
トミナガ「ビビったー！　この火じゃねえよな？」

○炎上する村長の家

駆け付けた消防隊員たち、井戸や水を探す。

下田、白井に気づく。

下田　「私は私の思い出とともに消えるわ」

火の中に飛び込もうと。

白井　「いかん！」

体を張って止める白井。

下田　「死なせてよ！　これ以上生きてて何になるのよ！　じっと隠れるように生きて来て！　それが終わったからって、これから何して生きればいいのよ！」

平手打ちをする白井。

白井　「俺は正義が何かわからんけどさ！　アンタが死んだらここの人たちが悲しむだろ！　保坂さんが死んだときみたいに！　少なくとも俺は悲しいよ！」

下田　「……」

消防隊、放水開始。
下田、膝から崩れ落ちる。
白井　「……」
勝村　「立派な人助けでした」
白井　「あ……いえ……ただ夢中で……」
消防隊、火を消してゆく。
白井　「私、集団とか、組織とかもうこりごりだと思っていましたが」
勝村の、まだ持ったままの懐中電灯。
白井　「息が合う人がいるのは、嬉しいものだと思いました」
勝村　「……（ふ、と笑う）」
白井　「あれ？」
勝村　「？」
白井、手袋がない。
白井　「あれ、いつ？　どこでなくしたの？……」
探すが、見つからない。
崩れる明神家。両面宿儺が消し炭になってゆく。

○松風荘、乱交パーティー

トミナガ「ヌルヌルイェー！」

椿油を投入。嬌声はひときわ高くなる。

トミナガ「これで人口増えるんじゃね？　セックス村大豊作！　そしたら俺村長だー！」

タイトル【時効、成立】

暗転。

○後日、長野駅

大荷物を抱えた勝村、駅に降り立つ。

敬礼で出迎える長野県警の刑事。

刑事　「長野県警へようこそ。辺鄙なところで退屈だと思いますが」

勝村　「こないだ大事件があったじゃないですか」

刑事　「そうでした。そのご担当でした」
敬礼で返す勝村。
勝村　「正義は、どこででも出来ます」
勝村、山のほうを見つめる。

○よく晴れた海

海辺に停められた白井のタクシー。
タクシーの表示は「自家用」となっている。
妻のサヤカの写真と共に、白井は海を見ている。
犬のサヤカ、白井の隣に。白井はその頭をずっと撫でている。

○早朝、椿が満開の、霧の窪内村

○下田の家、中

朝目覚めて、布団をきれいに畳む下田。

トランク一つだけ持ち、家を出る。

○村の入口、霧

トランクを引いてきた下田。

大鳥居の切り株の前で立ち止まる。

車がこすった塗料の跡を見て、愛おしそうに触る。

大鳥居の外に出るか、村に残るか、迷う。

（終）